シーン3

「こんにちは、勇者君。今日も素敵な1日ですね。ああ、そうそう……」

「数人の村の少年たちと何かこそこそと相談してましたよね？」

「……私たちサキュバスのことを、近隣の町に知らせにいこうと、相談してたんですっけ……あら？　知られてないとでも思ってたのですか？　ふふふ、可愛いですねぇ」

「ん？　大丈夫ですよ。私は全然怒っていませんから。むしろ少し反省していたのです。だって……」

「あなた方が悪いのではなく、きちんと祝福してあげれていないのが悪かったのですから」

「なので安心してください。もう心配はいりませんよ」

「キミとお話をしていた村人の方々は、先輩のシスターたちがしっかりと洗礼をしてあげましたので、今はもう完全に神様の信徒、眷属になってますから」

「洗礼ですか？　ええ、神様の祝福を受け入れた方々を真の信徒にして差し上げる儀式なのですが、祝福をなかなか受け入れてくれてない迷える子羊たちでも洗礼を受ければすべて素直な子に生まれ変わってくれる素敵な儀式なんですよ」

「ふふふ、勇者くん。キミは何も心配しなくていいのです」

「私がしっかり祝福をしてあげますので、大丈夫ですよ。勇者くん用の洗礼の儀式はきちんと考えてありますので」

「今、不安に思っている心も、神様に対する不信も、祝福されることへの疑問も、すべて私が塗りつぶしてあげますから。私、頑張っちゃうんですから。ふふふ」
「幸い、私は今まで村の人たちをたくさん犯してきましたので、その善行で神様からの祝福の力が増しています。このふたなりチンポの精液で、皆さんと同じように、気持ちいいことしか、考えられないようにしてあげますよ」

「……ふふ、まだ不安ですか？　大丈夫、大丈夫なんですよ」
「しっかりと祝福を受けさえすれば、幸せをたくさん感じることができるんですから」
「さぁ、このふたなりチンポにお祈りを捧げましょう」

「そうですねぇ……あぁ、そうだ。しっかりとお祈りを受けれるように、キミの喉の奥まで使っておちんちん様にご奉仕をしてみてください。舌先から、鼻と喉の奥でおちんちん様を味わえるから大好きになるひといっぱいいるんですよ」
「ふふふ、我慢なんてしなくていいのですよ？　さぁ、どうぞ。お召し上がりくださいませ」
「……んぅっ♡　あぁ♡……いいですね。ふふ、すっごく、いいです♡」
「お口の中の熱さが、伝わってきますよぉ。あぁ♡　素敵です。ほら、頑張って、もっと奥まで咥えてみせて……♡」
「んぉ♡……はぁ、あぁ♡……いいですねぇ、いい子です♡　ふふふ。やればできる子なんですねぇ♡」
「んぁっ、ふぅ♡　んっ♡……喉奥が、締まって、すごく、気持ちいいですよぉ♡」

「勇者くんのように魔への抵抗が高い人間は、数回の祝福では、足りないこともあるんです」
「んふ♡　でも、こうやって……何度も、んっ……何度もぉ、少しずつ、祝福を積み重ねていけば、最後は私みたいになれますよ♡」
「はぁ♡……ふぅ♡……ふふふ、神様の立派な眷属になりましょうねぇ♡」
「んっ……あぁ♡　もっと、吸ってください……はぁ♡　はぁ♡……もっと、じゅぶじゅぶ、させて♡……んんっ♡♡」
「いいですねぇ、いい……あぁ♡　素敵ぃ……キュウキュウって締まってます♡」
「勇者くんの喉マンコ、最高に気持ちいいです♡　ふふふ♡　奉仕の心もちゃんと心得てるんですね。素敵ですねぇ♡」
「さすがは私の勇者くんです。んっ♡　はぁ♡……はぁ♡……あぁ……♡」
「ふたなりチンポを授かって正解でしたねぇ♡　こんなに素敵なことができるんですもの♡」

「1か月ぐらい前に来た巡礼のシスター達を覚えてます？　あの中に私にふたなりチンポを授けてくれたサキュバスさんがいらしたんですよ♡」
「そして、たくさん犯されて、祝福していただいて♡……こんな素敵な身体になることができました♡」
「ふふふ、素敵な奇跡ですよねぇ♡」

「何になるかは人によっては違うらしいんですよね。オークだったり、スライムだったり、悪魔にもなった方もいるんですよ」

「キミは何に成りたいですかね？」

「……んんっ♡　あぁ♡　もう、ダメですね♡……お顔トロットロじゃないですか♡」

「喉奥を犯されてるのに、たくさん感じてくれてるんですねぇ♡……ふふふふっ。嬉しいです♡　よだれダラダラこぼしながら、体も震えちゃってます。それでも気持ちいいんですよね？」

「だって、キミのおちんちん、触られてもないのに、勃起しちゃってますもん。ふふふ♡」

「あぁ、どうして、勇者くんはこんなに可愛いんでしょう。本当に素敵♡」

「息が上手くできないですか？　でも気持ちいいんですよね？」

「喉が拡げられて苦しいですか？　でも、たくさん感じちゃってるんですよね？」

「いい、いいわぁ♡……んんぁっ♡……はぁ、ふぅ♡……んぁっ♡……喉マンコ気持ちいいです♡」

「もう出ちゃいそうです……んっ♡……ふふふふ。全部、受け止めてくださいね♡」

「勇者くんのためでもあるんです♡　いっぱい祝福してあげて余計なこと考えられなくなるぐらいいい子にしてあげないと……ですから……んんっ♡」

「あぁ♡　出るっ、出ちゃいます♡……んんんっ♡　喉マンコに♡　いっぱい、ドピュドピュしちゃいますぅっ♡」

「んっ♡　あ、ああ♡　んあぁああ！　せーし♡　私のくっさいふたなり精液、勇者君にあふれるまで注いてあげます♡！　んひぃっ、はひぃぃいいい♡♡♡！！！」

「あぁ♡　あぁぁぁ♡……んっ♡　はぁ♡……はぁ♡……はぁ♡♡……ふぅ……んっ♡♡♡」

「はぁ、はぁ♡……いっぱい、出てるぅ♡……はぁ、はぁ……♡」

「注ぎ込んで、あげますね♡……喉の奥でたっぷり味わってください……あぅんっ♡……あぁ、抜けてしまいました……はぁ♡　はぁ♡……あぁ、こぼれそう……♡」
「ちゅぷっ♡　んっ、くちゅっ♡……ちゅっ♡　んぁ♡　んぅ♡♡……ちゅっ、ちゅぅっ♡……ふぅ、ふぅ♡　はぁ……♡」
「せーしまみれの勇者君の唇美味しかったですよ。勇者君も全部呑み込めてえらい、えらい……ん？」
「あぁ、勇者くん、そんな物欲しそうな顔して、どうしたんですか？」
「全然足りませんか？　そうですか、そうですよねぇ？　ふふ、キミならそう言うと思ってました♡」

「私のふたなりチンポもビンビンにいきり立ってしまっています」
「これでズボズボされたいんですよね？　これが、欲しくて、堪らないのでしょう？」
「ふふふふ、安心してください♡」
「キミの中にしっかり祝福してあげますから……どうしたらいいか、分かりますよね？」
「……あぁ、いいですよぉ。本当に可愛いですねぇ♡」
「自分から私にお尻を向けて、ちゃんと見えるようにアナルを広げちゃった♡」
「少し恥ずかしいですか？　顔赤いですもんね。でも、それよりもアナルをチンポで、ずぶずぶってされたいんですよね？」
「男の子としてはどうかと思いますが、おねだりする姿は完璧ですねぇ♡」
「安心してくださいね。いっぱい可愛がってあげますから……♡」

「……あら、もしかしてキミ、ここに来る前にお尻を綺麗にしてきたんですか？」

「見たらすぐに分かりますよぉ♡　そっかぁ、そもそもふたなりチンポで祝福してもらうのが目的だったんですねぇ♡」
「よかったですねぇ♡……あぁ、こんなに簡単に咥えこむように、なっちゃったんですねぇ♡」
「んんっ♡……締まりはこんなに、いいのに、ふふっ♡……簡単に、飲み込んでいきますよ？」
「やっぱり勇者くんのお尻の穴は最高に気持ちいいですねぇ。んっ、はぁ♡……ふぁ♡」

「体の中に、おちんちん様が入ってくる感触はどうですか？　嬉しいですよね？」
「こんなに体震わせながら、感じてるんですもの……よかったですねぇ……んっ♡……はぁ……♡」
「あぁ♡　全部、入っちゃいましたぁ……根本までずっぽりですよ♡」
「キミのおちんちんくんも喜んでますねぇ、ビクビクしっぱなしです……ふふ♡」
「もうホントにメス穴になっちゃいましたねぇ、後ろから貫かれて、女の子みたいに嬌声あげちゃうの、可愛い、キミのメス声もっといっぱい聞かせてください♡」
「んふっ♡……あぁ♡　いい……メス穴アナル最高です。気持ちよくて、ずっとじゅぼじゅぼしていたいくらいですよ♡」

「んっ♡……はぁ、はぁ♡……あっ♡　ふぅ♡……んんっ♡　締まるぅ……はぁ、んぁっ……♡」
「プルプル震えながら、お耳まで、真っ赤になっちゃいましたね。可愛いです……♡」
「ああ、祝福を受け入れられるようにお耳もペロペロしてもっと気持ちよくしてあげます♡」
「ちゅっ……ちゅるぅっ♡　ちゅぷっ♡　んぁ♡……くちゅっ、くちっ……くちゃ、くちゃ……んちゅっ、ちゅぷっ……♡」

「ふぅ……ふぅ♡……本当に、敏感なんですねぇ♡……震えて、悶えて、喘いで……もっと悦んでほしくなっちゃいます♡」

「ああ、右のお耳を感じさせてあげたなら左のお耳も♡　同じように気持ちよくさせてあげませんとね」
「ふっ……んちゅ♡……ちゅっちゅ♡……ちゅる、ん♡……はぁ♡　はぁっ♡……ちゅぱっ、ちゅっぽ……ちゅ、んはぁ♡　ちゅっぷ……♡」
「ぷはっ、ごちそうさまでした♡　勇者くんどんどんいい子になってきて私もうれしいですよ♡」
「これもすべて、神様の祝福の賜物ですねぇ♡……キミが何回も私に抱かれて、ふたなりチンポをたくさん味わったことで、こんなにも本能に素直になることができてるんです♡　私も勇者君が受け入れてくれてとっても嬉しいです♡」
「ちゅっ♡……こんなに、ちゅぱっ♡……んぁっ♡……はぁ♡……獣の交尾みたいに、後ろからぁ……されて、感じちゃうんですよぉ♡」
「男の子なのに、ちゅぱちゅぱ……んふふ♡……たくさん、喘いで、気持ちよくされちゃうんですよぉ♡んぁ♡……んっ♡……はぁ♡……ふぅ♡……んっ♡……きゅうきゅうってメス穴が締まってますぅ♡」
「おちんちんくんも、もうパンパンじゃないですかぁ……ふふふふ♡」
「トロトロって我慢汁、だらしなく垂れ流してますねぇ……いやらしいです♡　本当に可愛い……♡」
「もっと、いっぱい感じさせてあげます♡　んっ♡……はぁ♡……トロトロに溶けるくらい、快感におぼれてくださいね♡」

「あぁ♡　すごい、締まるぅ♡　んっ♡……メス穴アナルすごい、すごいよぉ……はぁ♡　はぁ♡　搾り取られちゃいそう♡」
「ちゅっ、ちゅるっ♡　ちゅぷちゅっ♡　んぁ♡　ちゅくんっ、はぁ♡　んっ♡　あぁ♡……勇者くんの、お尻♡　ずんずん、突きほぐすの好きぃ……♡」
「あむぅっ♡　くちゅっ♡　ちゅぷちゅっ♡　ちゅぅぅぅっ♡♡♡　んはぁっ♡……はぁ♡　はぁ♡　んんっ♡♡」
「お耳、攻められると、メス穴もキュンキュンしちゃうんですね♡　すっごく気持ちいいですよぉ♡」

「もう、そろそろ限界、みたいです♡……はぁ、はぁ♡　いっぱい、中で出して、あげますねぇ♡……んっ、んんっ♡」
「あは♡　すごい……んっ、キミのおちんちんくん、震えっぱなしじゃないですかぁ♡」
「中出しされるって分かって、勇者くんの体も、悦んでくれてるんですねぇ♡　いちいち反応が可愛いですね♡」
「いい、本当に素敵♡……んっ、はぁはぁ♡　はぁ♡……んぁっ♡　ふぅ♡　んっ♡♡　んんっ♡　くっ、あぅっ♡♡♡」

「あぁ♡　すごい、きてるぅ♡　んっ！　大きいの、きてるよぉぉっ♡♡♡……んんっ♡！　もう、出ますぅっ♡」
「祝福汁♡　ふたなりちんぽのしゅくふくぅいっぱい！……んぁっ♡　んっ♡　ひぅぅっんんっっっ♡♡♡！！！」

「あぁぁっ♡　あっ♡　んんっ♡……はぁぁ♡　はぁぁ♡♡……はぁ♡　はぁ♡♡……んっ♡　すっごく、搾り上げられてるぅ♡」
「はぁ♡　はぁ♡　ふぅ♡♡……あぁ♡　勇者くんも、派手にイっちゃってますね♡……懺悔室の中私たちの匂いでいっぱいです♡」

「すごいですね。おちんちんくん♡　全然弄ってなかったのに、アナルほじられて、ところてん射精しちゃったんですね♡」
「もう立派な、おちんちんの付いたメス穴ですねぇ♡　ふふふふ♡」

「トロトロの表情晒して、口もゆるみきってますねぇ♡……気持ちよくなってくれて、私も嬉しいですよ……んっ♡……あぅんっ♡……はぁ、はぁ♡……はぁ……♡」
「私のチンポ抜いても、キミの穴、戻らなくなっちゃってますね♡……精液ぽたぽたっれてもったいない。ん、ちゅぱ♡」
「今日はこれでおしまいですが、次の集会で勇者くんを完全に堕としてあげる洗礼の儀式を準備しておきますから期待して待っててくださいね♡」